

## テーマ：留置針が気にならない病衣や工夫

### ■ 背景

入院患者用の病衣は、主には①医療行為のしやすさ、②患者さんの快適性、③安全管理の3点を重視して作られている。

留置針は静脈への継続的で安全なアクセスを確保し、薬剤や輸液などを迅速かつ確実に投与するために設置される。留置針を設置されている患者が留置針を自己抜去する理由は、単なるわがままではなく、切実な理由や脳の機能異常が隠れていることが多い。例えば、身体的不快感（痛みや痒み）、認知症や精神疾患による理解度低下、視覚的刺激（目障り）などの理由が挙げられる。

自己抜去を防止するために、例えば下記の処置を行う事がある

- ・留置針を固定している テープの種類を変える
- ・留置針の刺入位置を変更する
- ・留置針を包帯など覆い隠す
- ・長袖の病衣を着用させて留置針を視界に入れないようにする

それでも尚、留置針を自己抜去してしまう患者が一定数存在するため、その対応に苦慮する場面がある。



### ■課題と解決のアイデア例

- ・点滴ラインが安定し、袖の内側から肩方向へ自然に通る構造とすることで、患者はラインが気にならないようにする
- ・袖を任意の長さに調節する機能を付与し、患者の視界に留置針部が入らないようにする
- ・袖口をボタンやマジックテープなどで固定し、患者の視界に留置針部が入らないようにする
- ・病衣の中あるいは外に点滴ルートが通る経路を作り、点滴ルートが直接肌に触れない/見えない様にする
- ・留置針刺入部が見えない様にするカバー
- ・留置針設置部へ子・孫や、推しなどの写真を貼る（貼ることが出来るような工夫をする）



### ■市場性

年間の入院患者は約1,400万人で、そのうち約70%の患者で留置針が設置されている。さらに、認知症やせん妄のある患者の15～30%で自己抜去が発生すると考えられる。このことから、日本全体では年間およそ100～300万人規模で自己抜去が起きていると推定される。